

仏の願い

平成 25 年 西雲寺だより 秋号 (33 号)

報恩講のご案内

10月17日(木)～19日(土)

17日・・・・・・・・ お逮夜(2:00～) お初夜(7:00～)

18日 お日中(10:00～) お逮夜(1:45～) お初夜(7:00～)
└御伝抄拝読 └御伝抄拝読

19日 お日中(9:30～)

法話 福井 野世信水師 (18日～)

18日はバスが出ますのでご利用下さい。

放送会館前発(8:50)～東別院前～工大温泉前～西安居經由
坪谷発(9:00)

常森発(9:00)～鮎川～小丹生經由

おさそい合わせの上 多数ご参詣下さい

もくじ



- | | |
|--------|-------------------|
| 2～3ページ | 親鸞聖人のご生涯・晩年の親鸞 |
| 4～5ページ | 動座法要・永代経・修復工事の様子 |
| 6ページ | 福島の子供たちお寺にホームステイ♪ |
| 7ページ | 山門掲示板・正信偈に先輩の感動あり |
| 8ページ | おかみそり・おちごさんのご案内 |

親鸞聖人のご生涯

晩年の親鸞

宗祖親鸞聖人は波乱に満ちた、苦勞多き人生を九十歳にて終えられますが、その長き人生において、最もいのちが輝いたのが、ご長男を善鸞を義絶（ぎぜつ）された八十四歳から、八十五歳の間です。深い悲しみのなかから、たくさんのお聖教（しょうぎょう）をおつくりになり、関東のお弟子やお同行に送られています。そして弥陀の本願を信じて生きるよろこびを「正像末和讃」としてうたい上げられました。その冒頭の和讃が「夢告（むこく）和讃」といわれるものです。

弥陀の本願信ずべし
本願信ずるひとはみな
撰取不捨の利益にて
無上覚をばさとするなり

このご和讃を、康元二年（八十五歳）の二月九日の夜、寅の時に夢の告げに受け、嬉しさのあまり書きつけたと記しておられます。弥陀の本願を信ずる身に、この罪深い身が大悲に撰め取られて捨てることがないという利益を得、無上涅槃という仏のさとりをひらく身とさせていただくのだと。そのよろこびはいかばかりだったかと思われまます。この夢告をだれから受けたか記されてはいませんが、救世（くせ）菩薩の化身であるとされる聖徳太子であることに間違いありません。聖人は人生の大きな壁にぶ

ち当たった時、聖徳太子が父母の如くに身に添って励ましてくれたことを深く受けとめておられたのです。この夢告のあと聖人は「聖徳太子奉讃和讃」を二百首以上つくっておられます。

大悲救世聖徳皇

父のごとくにおわします

大悲救世観世音

母のごとくにおわします

聖徳太子の恩徳

聖徳太子は親鸞聖人よりも六百年も前の方ですが、聖人が人生において歩むべき道に迷われた時、夢の告げとなつて、聖人を導いておられるのです。最初は聖人十九歳の時、比叡山の修行に行き詰まって、聖徳太子の磯長（しなが）のご廟にお参りしたとき、二度目は二十九歳の時、比叡の山を下りて、聖徳太子が建立された京都の六角堂に参籠されたとき、そして三度目が八十五歳のときの夢告和讃です。

聖徳皇のおあわれみに

護持養育たえずして

如来二種の回向に

すすめいれしめおわします

聖徳太子は親鸞聖人より六百年も前の方で、聖人はもちろん聖徳太子から教えを受けられたわけではありません。しかし聖徳太子から護持養育をうけたといわれるので、私が比叡山の山を下りて、法然上人に出会い、本願念仏の教えに遇うことができたのは、ひとえに聖徳太子の護持養育のおかげだといわれるのです。それと同じように、私たちが仏法をよろこぶ身にさせてい

ただいたのも、両親や祖父母、また先祖の護持養育のおかげではないでしょうか。如来二種の回向とは、往相（浄土へ歩ませていただくこと）還相（大悲の徳をいただくこと）つまり大乗の仏道、浄土真宗のことです。

聖徳太子は、三十三歳の時に、「和をもって貴しと為す」という仏教精神に基づいて「十七条憲法」を制定し、『法華経』『維摩経』『勝鬘経』という大乗の経典を註釈した『三経義疏（さんぎようしよ）』をつくつておられ、親鸞聖人は「和国の教主 聖徳皇」と讃えておられます。

聖徳太子は天皇の血筋で、推古天皇を叔母にもつて、その摂政になられました。太子は聡明な方で「豊聡耳（とよとみみ）」といわれ、一度に八人の訴えを聞いて、それぞれ適切な指導をされたと伝えられています。

聖徳太子は二十歳の若さで推古天皇の摂政となられました。摂政とは天皇に代わって政治を行なうことです。その当時の日本の政治状況は蘇我氏や物部氏、天皇家などの間で権力争いに明け暮れていました。聖徳太子亡きあと、聖徳太子のご子息山背大兄王（やましろうのおおえのおう）は蘇我入鹿（いるか）の兵に攻められ、一族は全滅させられました。

聖徳太子は権力欲しさに肉親を殺し合うような凄まじい状況の中に生まれて、人が本心に睦み合い、助け合つて生きていける社会ができないものかと、仏教の教えを取り入れていくなかで悩まれたのです。なぜ人間は争うのか、それは名誉や権力、財産

が欲しいという欲望、そして相手がうまいことをしたという妬み、恨み、そういうところが和らぎを壊していくと、聖徳太子は現実的な政治と、人間がもつ煩惱の狭間で苦悩されたのです。

親鸞聖人も三十五歳の時に、時の権力によつて吉水の教団は解散させられ、流罪・死罪十二名という承元の法難に出遇われ、また八十歳前後には関東の教団において異義がおこり、お弟子や御同行のいがみ合いや奪い合いが生じ、ご長男善鸞を義絶するという辛い悲しいでき事を経験されました。そのようななかで「和を以て貴しと為す」という仏教精神でもって、政治を行ない、最後は権力争いにまきこまれ、一族が全滅するという悲しい結末をむかえられた聖徳太子のご生涯にこころを致し、追慕されていかれたものと思われます。

法然上人への追慕

親鸞聖人は晩年の八十四歳から八十五歳の間、燃え尽きるいのちを惜しむように、多くの著述をし、関東のお弟子に送っておられますが、なかでも注目すべきは、法然上人の法語、伝記、御消息（お手紙）類を集めた『西方指南抄（さいほうしなんしょう）』（全六巻、国宝）を著作されていることです。何故聖人は最晩年にこれほど大部の法然上人の言行録をお作りになったのか、そこには法然上人に対する深いおこころがあったものと思われます。

聖人には三つのお名前があります。親鸞と、吉水時代に法然上人からいただいた綽号と、善信です。流罪になられた時は善信

を名告っておられました。それ以後は愚禿釋親鸞と名告っておられました。しかし最晩年になると親鸞と善信を使い分けておられます。三帖和讃のなかでも『正像末和讃』は「愚禿善信作」となっており、また御消息（お手紙）にも善信の名が使われているものがあります。どう使い分けをされたのか分かりませんが、法然上人を追慕して書かれたものには善信というお名前が使われたのではないのでしょうか。法然に出て法然に帰るといのが、親鸞聖人のご生涯であったといわれますように、聖人の恩師に対する敬慕の念は、晩年にいたって、いよいよ篤いものがあつたことが思われます。

愚者となりて往生す

親鸞聖人八十八歳のお手紙の中に次のように述べられております。

亡くなられた法然上人が「浄土の教えを信ずる人は、愚者となつて浄土に往生するのである」と言われたこと、たしかにうけたまいました。また、何の分別もないあさましい人々が訪ねてくるのをごらんになつては「かならず浄土に往生するにちがいない」と微笑まれるのを見ました。また逆に学問を積んだ見るからに賢そうな人が訪ねてきたときには、「あの人は浄土に往生することができるとは、あの人か」と言われたのを確かに承りました（口語訳）

「浄土宗の人は愚者になりて往生す」これは親鸞聖人にとって法然上人より賜わつ

た最も大切なおことばであり、ご自身も「愚禿釋親鸞」と名告られました。聖人は最晩年になつてこのおことばを再確認し、如来のご本願を生きるものとして、いよいよ「愚か者」の身に帰つていかれたのです。

「愚か者」とは知恵がないということではありません。煩惱に惑い、欲にかられ、人を自分をも傷つけてしか生きていくことができない赤裸々な人間そのものを生きる人たちです。「愚者になりて」とは愚か者になつて往生していくのではなく、本来「愚」でしかないのに賢さを誇り、善をとりつくるって生きていく「にせの私」にめざめ、「本当の私」を見つめ、私に帰るところに浄土に往生していく確かな世界が開けてくるのです。

あるお寺の掲示板に次のようなことばが書かれていました。

こんなに賢い人、偉い人が多いのにどうしてこんないやな世の中になつていくのでしょうか

『正信偈』の中に「邪見憍慢悪衆生、信楽受持甚以難、難中之難無過斯」とあります。邪見憍慢の悪衆生は、如来から賜わる信心を得ることは難しい、難しいなかでもこれほど難しいことはない。親鸞聖人は教えていて下さいます。これは誰のことでもなく、私のことを教えていて下さるのです。愚者になつて往生の道を歩むことは私たちにとって果たして可能なのでしょうか。そこに過去、現在、未来にわたる如来さまのお育てが私にかけられているのです。

（住職）

動座法要（7月6日）



きれいに修復されたお御堂へ、ご本尊をお移りする法要を営みました。およそ半年ぶりです。それに先だって、世話方の皆さんが大きな仏具をお磨きして下さいました。とてもにぎやかでした。



仮安置していたお座敷で
最後のおつとめです



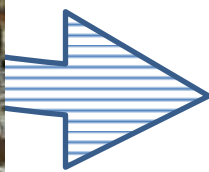
おかごに
お納めして
丁寧に
運びます



阿弥陀さまが
元の位置に
お戻りになりました



200年前の輝きを取り戻した
宮殿へ御安置しました



世話方のみなさんと
しみじみと
お参りいたしました

永代経がつとまりました



佐々木和雄師



きれいに修復された本堂で初めての法要



おときの品々



欄間の美しさに目を奪われます



縁の下で支える皆さん

しっくい壁工事 電気配線工事



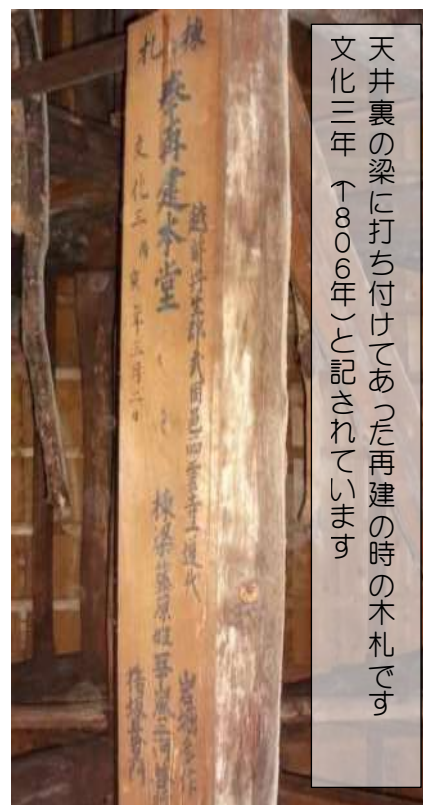
しっくいを塗り直して
いただきました



本堂の天井裏の配線をすべ
て交換していただきました



古い線とガイシです



天井裏の梁に打ち付けてあった再建の時の木札です
文化三年(1806年)と記されています

今年もようこそ♪ 福島の子供たちショートステイ

7月24日から8月8日まで、殿下全体で福島の子供達をあずかりました。仮設住宅から参加してくれた子もいましたし、福島ではまだまだ不自由な暮らしを強いられているのだと教えられます。被災地から望まれる間は続けていかねばと思います。



みんなでお参りました



朝 5 時半にお鐘もつきました



二ツ屋町の川で
ウォータースライダー



大台所で晩ご飯のお手伝い

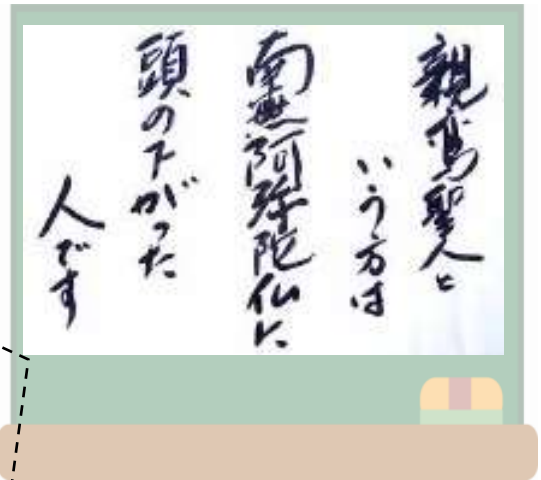


お寺の下の川でも遊びました

志大無辺
 この命ゆきまわして生かすれゆ
 少親のお意忠に
 燈仏具定をあやせり
 無明の時も破りて
 守り賜えらあな尊んまよ
 この心そのまを救らごまの
 云々ののりカ声
 目には見ええらわど無潮の限り
 少親まびるしり
 意なきしり深き頂きまよん
 この魂久遠り少親に導かれ
 真の因に入りぬれば
 少親がまよす熱火の如く
 庵入無辺に涙あやせり
 わがはらうらに信えん

西列所町 釈真光妙映
※高田派の法名です

山門掲示板



このお言葉をいただきますと、親鸞聖人の尊さ、有難さがしみじみただけてくると同時に、どれだけ聴聞しても南無阿弥陀仏に頭の下がらない私が恥ずかしくなります。

親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり『歎異抄第二条』
親鸞聖人は、法然上人のおおせを聞いて「ただ念仏して」と頭が下がったのです。如来さまのご本願は「わが名を称えよ」ということにつきまます。このお言葉にこめられている如来さまのおこころを聴聞していくのが浄土真宗のみ教えです。如来さまのおこころが私にいただけたなら、このしぶとい私の頭が下がるのです。報恩講がつとまりますが、報恩講というのは「私はいったい南無阿弥陀仏に頭が下がっているだろうか」ということを確かめる、大事なお勤めです。(住職)

『正信偈』に先輩の感動あり

一切善悪凡夫人 聞信如来弘誓願
 仏言広大勝解者 是人名分陀利華

読み方

一切善悪の凡夫人、如来の弘誓願を聞信すれば、
 仏（釈迦牟尼仏は）、広大勝解の人と言えり。
 是の人を分陀利華（白い蓮）と名づく。

意味

善きも悪しきも全ての凡夫人よ、阿弥陀様の大きなお心をはっきりと受け止められれば、お釈迦様から、「あなたは広くて大きくて勝れた仏さまと同じですよ」と褒められるのです。「あなたを泥中に咲く最高の白蓮と名付けましょう」と言われるのです。

- ☆ お釈迦様から褒められる？ この僕が？
- ☆ 僕が仏さまと同じってどういうことやろう…
- ★ 阿弥陀様の心をはっきりと受け止める（聞信する）ってどういうことやろう？

おかみそりを受けませんか

生きている今こそ、おかみそりをして法名をいただきませんか！
釈〇〇という新しい名前をいただいて、お釈迦さまの弟子になりましょう。
おかみそりは終点ではありません。教えを聞き始める出発点です。

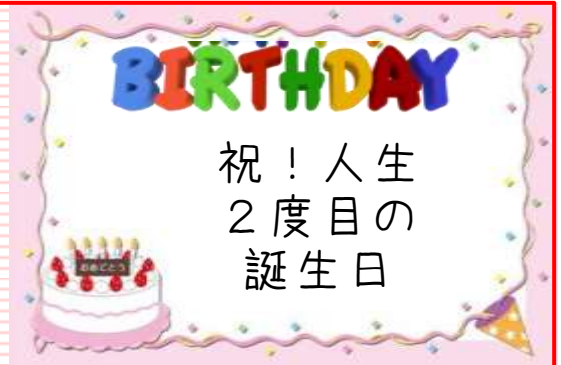
生まれ変わってみましょう 見つめなおしてみましょ
一緒に問い始めましょう 一緒に歩き始めましょう

西雲寺 宗祖親鸞聖人 750 回大遠忌



京都に行かずとも
武周で受けられる
チャンスです

この機会に
おかみそりを
受けましょう



祝！人生
2度目の
誕生日

西雲寺のおちごさん

日にち H26年4月27日
(日) 午後1時開式
場所 武周町内を200mほど
歩いて西雲寺の本堂へ
お参りします
費用 おひとり7,000円

西雲寺のご門徒でなくても
ご親戚やお知り合いの方も
ご一緒にどうぞ

申込締切を変更致しました
H26年2月末日締切

西雲寺で帰敬式ききょうしき（おかみそり）

日にち H26年4月27日（日）午前8時開式
場所 武周 西雲寺本堂
資格 満8歳以上の方ならどなたでも
費用 20歳以上 20,000円
19歳以下 10,000円（小学生は5,000円）

H26年2月末日締切

「おちごさん」「おかみそり」のお申し込みは
在所の方は世話方さんまで 市街地の方や遠方の方は直接当院まで
お待ちしております

発行

真宗仏光寺派 専念山 さい うん じ 西雲寺
住職 護城一寿
筆頭総代 吉川芳弘
編集責任者 護城一哉
〒910-3523 福井市武周町5-2
電話 0776-97-2138
メール kmgojo@mx3.fctv.ne.jp
ホームページ <http://arukou.net/>

次世代の方、分家された方に！
お寺から郵送いたします。どうぞ
ご遠慮なくお申し出下さい。

みなさんの声 大募集！
原稿や作品はもちろん、ご意見、
ご感想など、どしどしお寄せ下さい。
郵送でもメールでも構いません。お
待ちしております。